

☆足りぬ避難所 命の不安 医療ケアが必要な被災者

朝日新聞デジタル 兵庫 2019年2月24日

<https://www.asahi.com/articles/photo/AS20190122003121.html>

> 人工呼吸やたんの吸引といった医療的ケアを必要とする人らを災害時に受け入れる避難所が足りていない。医学の進歩で在宅で暮らす人たちが増えた一方で、避難所側の態勢づくりが追いついていないからだ。そうした現状に、神戸市内の入所施設で新たな取り組みが始まった。

高齢者や障害者といった災害時に配慮が必要な人たちのための避難所として「福祉避難所」がある。ただし、これは、いったん小学校など一般の避難所に避難した後に、必要に応じて案内される二次避難所にあたる。常に医療的ケアを必要とする人らにとっては、そこにたどり着くまでにかかる時間が、命の危険に直結しかねない。

神戸市は昨年、独自の取り組みとして一般の避難所を経ずに直接避難できる「基幹福祉避難所」に特別養護老人ホームなどを指定し、市内全区に整備した。それでも、施設側の人材や設備面から、医療的ケアが必要な避難者を受け入れられる態勢は十分に整っていないのが現状だ。

神戸市は昨年、独自の取り組みとして一般の避難所を経ずに直接避難できる「基幹福祉避難所」に特別養護老人ホームなどを指定し、市内全区に整備した。それでも、施設側の人材や設備面から、医療的ケアが必要な避難者を受け入れられる態勢は十分に整っていないのが現状だ。

施設側も災害時の対応に苦慮する。昨年の台風21号で、和歌山県岩出市にある和歌山つくし医療・福祉センターでは、停電した地域から避難してきた4家族を急きょ受け入れた。林龍太郎センター長は「自家発電機がもつ時間にも限りがある。避難者が殺到したら、どう優先順位をつけたら良いのか」と話す。

こうした状況を受け、重症心身障害児者の入所施設「にこにこハウス医療福祉センター」（神戸市北区）は、災害時に医療的ケアが必要な在宅の障害者らを受け入れるため、施設内に鉄骨2階建ての避難場所を新設した。

重症心身障害は、重度の肢体不自由と知的障害が重複した状態で、医療的ケアの必要な場合が多い。以前は施設へ入所する人がほとんどだったが、市によると、昨年3月時点で市内に1234人おり、このうち約7割が在宅で暮らしているという。

「災害が起これば病院だけでは受け入れられない。阪神・淡路大震災のころにはなかった問題が起きている」。にこにこハウスの施設長で小児科医の河崎洋子さん（50）はそう指摘する。昨年11月、台風の上陸を想定した1泊2日の避難体験研修を開いて課題を探った。

参加した由良典子さん（59）＝神戸市西区＝は、「一般の避難所に行ってからでは間に合わない」と話す。三男の泰輔さん（25）は人工呼吸器が24時間必要で、三つある交換用も含めてバッテリーがもつのはわずか半日だ。

昨年9月の北海道地震で道内ほぼ全域の約295万戸が停電したことを知り、新たに持ち運びできる蓄電器を買い足した。ただ、災害が起きたときにどこへ避難すれば良いのか、不安はつきない。

にこにこハウスは神戸市の委託を受け、市内に暮らす重症心身障害児者の情報登録を進めている。災害時にスムーズに避難できるよう、受け入れ可能な施設や病院と協議し、個別の支援計画を作る方針だ。

河崎施設長は「大災害がいつ起きても、安心してもらえるような環境づくりをしたい」と話す。

…などと伝えています。



避難体験研修では、利用者や保護者が段ボールベッドで一夜を過ごした

＝昨年11月6日午後9時27分、神戸市北区のしあわせの村